脳内混乱中

—ごめん、まだ整理できてない。—

展覧会解説書

はじめに

この展覧会は、あなたの頭の中で起こっている「まとまらない思考」を 5 つの空間で体験する旅です。

私たちは毎日、たくさんのことを考え、感じています。でも、そのすべてが整理されているわけではありません。むしろ、混乱していることの方が多いのではないでしょうか。

この展示は、そんな「整っていない状態」を無理にまとめようとせず、そのまま差し出すことで、あなた自身の内面と向き合う機会を提供します。

展示の歩き方

所要時間：約45分〜1時間

各セクションには決まった正解はありません。感じたことをそのまま受け取ってくだ

さい。 途中で立ち止まったり、戻ったりしても構いません。 あなたのペースで進んでください。

セクション解説

1. 混乱

—思考がとっ散らかったままの状態—

何が起こるか：

- 無数の小さなブラウン管から断片的な映像が流れています
- 重なり合う音やノイズに包まれます
- 空間は真っ暗で、画面の光だけが頼りです
- テレビの配線があえて露出されています

体験のポイント： 頭の中で同時に起こっている無数の思考や感情を表現しています。何を見ているのか、何を聞いているのかがはっきりしなくても大丈夫。その「わからなさ」こそが、このセクションの核心です。

作家の込めた思い： ブラウン管特有のもやっとした画質・音質で、記憶の曖昧さや混乱を表現したかった。露出した配線は脳内を巡る血管や神経の繋がりを表している。

真っ暗な空間は不安な心理状態そのもの。この強烈な体験を最初に置くことで、観客に「これは自分の話だ」と感じてもらい、展覧会全体を自分事として受け取ってもらいたい。まさに「脳内に入る」没入体験を目指している。

---

2. 定まらぬ

—まだよくわからない感情たち—

何が起こるか：

- 揺れる透明な布（レースカーテンのような素材）に映像が投影されています
- 前のセクションで感じたことを付箋に書いて、布に貼ることができます
- 付箋は時々落ちることがありますが、それも表現の一部です
- 真っ暗な空間にわずかな照明が差し込んでいます

体験のポイント： 「混乱」で感じたことを言葉にしてみる段階です。うまく表現できなくても、間違っていても構いません。大切なのは「感じたことがある」ということ自体です。

作家の込めた思い： 前セクションの強烈な印象が残っている状態で、その思考のまま付箋に気持ちを書いてもらいたかった。固いボードではなく、あえて揺れる布を選ん

だのは「定まらない感情の揺らぎ」を表現するため。レースカーテンのような透明感のある素材にすることで、心の中の繊細で不確かな状態を視覚化している。もし貼った付箋が落ちても、それは混乱の中で思考が忘れられたり流されたりすることの表現として意図的に受け入れている。真っ暗だった前セクションからわずかに照明を加えることで、少しずつ内面が見えてくる過程を表している。

参加方法：

1. 用意された付箋に、前のセクションで感じたことを自由に書いてください
2. 正解はありません。単語でも、絵でも、記号でも何でも大丈夫です
3. 布に貼ってください。落ちても気にしないで

---

3. 作品群

—とにかく手を動かしていた時期—

何が起こるか：

- 新米の芸術学生たちの未完成作品が展示されています
- テーマは統一されておらず、様々な表現があります
- 展覧会を重ねるごとに、作家の成長過程を見ることができます

体験のポイント： 「完成」を目指すのではなく、「表現したい」という衝動そのものを大切にした作品群です。技術的な未熟さや迷いも含めて、創作の生々しいエネルギーを感じてください。

作家の込めた思い： ここは「感覚を優先して、とにかく手を動かしていた時期」を表現している。テーマがないからこそ見える純粋な「衝動」。詩、映像、スケッチ、ノイズなど、誰かの評価のためではなく「出さずにはいられなかった」表現を集めている。未完成で粗くても、そこには圧倒的なエネルギーがある。新米芸大生の作品を継続的に展示することで、作家の混乱期から成長過程までを見せ、「今この瞬間の混乱」も価値ある創作の一部だということを伝えたい。

見方のヒント：

- 「上手・下手」ではなく「何を伝えたかったか」に注目
- 作家の迷いや試行錯誤の跡を探してみる
- 自分にも似たような経験がないか考えてみる

---

4. 言葉にならない

—他人の声が、なぜか自分を映してくる—

何が起こるか：

- 暗い空間に一つのモニターがあります
- 学生たちが自分の気持ちを語る映像が流れています
- 編集されていない、生の声を聞くことができます

体験のポイント： 他人の言葉を通して、自分の中にある「名前のない感情」に気づく空間です。完璧に整理された話ではなく、迷いや沈黙も含めた生の声だからこそ、あなたの心に響くものがあるかもしれません。

作家の込めた思い： 黒く沈んだ空間で、モニターの中だけが白く光る。そこに映るのは学生たちがそれぞれの葛藤を語る姿。映像には一切編集を加えず、沈黙や視線の揺れもそのまま流している。「完成されたストーリー」ではなく「今この瞬間の、まだ名前のない感情」を大切にしたかった。自分の気持ちを他人の声で思い出す、静かな共鳴空間として設計している。

聞き方のコツ：

- 「共感できるかどうか」を考えすぎない
- 話している人の表情や間に注目してみる
- 自分の経験と重ね合わせてみる

---

5. あ！

—すべてがつながった、あの瞬間—

何が起こるか：

- 大都市の夜の街並みを歩きます
- ネオンや雑音に包まれた中を進みます
- 突然、街頭ビジョンが光り、「あ！」という音が響きます

体験のポイント： 日常の中で突然訪れる「気づき」や「ひらめき」の瞬間を表現しています。それは探そうとして見つけるものではなく、ふと現れるもの。そしてまた、静かに過ぎ去っていくものです。

作家の込めた思い： 大都市の夜を模した空間で、高層ビルの谷間を歩く感覚を作り出している。光、看板、ガラスの反射など、いつもと変わらない都市風景の中に、ふとした違和感が潜んでいる。街頭ビジョンの前で突然光が差し、誰かの声が「あっ」と響く瞬間。何かがひらめいたような気がする、でもそれが何だったかはっきりしない。考えようとして見つけたものではなく、ただ都市の中を歩いていて出会ってしまったもの。「ひらめき」が生まれる瞬間の不意打ちと、日常に潜む小さな兆しを体験として表現している。

歩き方：

- 急がずにゆっくりと歩いてください
- 周りの音や光を感じながら
- 「何かを探そう」とせず、自然に歩いてみて

この展覧会で大切にしていること

「正解」はありません

どのセクションでも、「こう感じるべき」という決まりはありません。あなたが感じたことが、あなたにとっての正解です。

「完成」を求めません

この展覧会自体も、完璧に整理されたメッセージを伝えようとはしていません。むしろ「整っていない状態」の中にある美しさや価値を大切にしています。

「共感」を強要しません

他の人と同じように感じる必要はありません。あなた自身の体験を大切にしてください。

最後に

この展覧会のタイトルには「ごめん」という言葉が入っています。

でも本当は、謝る必要なんてないのかもしれません。

混乱していることも、まとまらないことも、それ自体がひとつの状態であり、価値があるものです。

社会は私たちに「整った答え」を求めることが多いけれど、私たちはそんなに単純な存在ではありません。

この展覧会が、あなたの中にある「整っていない部分」を少しでも肯定できるきっかけになれば幸いです。

展覧会情報

タイトル： 脳内混乱中 —ごめん、まだ整理できてない。—

形式： インスタレーション（体験型展示）

所要時間： 約45分〜1時間

対象： どなたでも（特に10代〜20代の方におすすめ）

次回予告： 「脳内混乱整理中」「脳内混乱整理済」へと続く3部作の第1弾

この解説書は、展覧会の体験を補助するものです。読まずに体験することも、体験後に読むことも、どちらも自由です。あなたのペースで楽しんでください。